

## 尹奉吉の思想と独立運動の戦略

金度亨

(独立記念館韓国独立運動史研究所)

はじめに

1. 少年期：漢学と近代的学問を学ぶ
2. 青年期：農村啓蒙運動に身を捧げる
3. 独立運動に参加するため中国に渡る
4. 義烈闘争のために韓人愛国団に加わる
5. 虹口公園義挙を執行する

おわりに

はじめに

尹奉吉は満 24 才の若さで短い人生を終えたが、彼が 1932 年 4 月 29 日に举行した虹口公園義挙は韓国独立運動の歴史に大きな足跡を残したことは間違いない。なぜなら、尹奉吉義挙によって沈滞に陥っていた韓国独立運動に新たな活路が開かれたのみならず、この義挙が韓国民の独立意志を世界万国に知らしめたからである。そして、この義挙は日帝侵略におじけづき抵抗さえ夢見ることができなかった 4 億の中国民衆に反日意識と抗日闘争の意志を吹き込み、中国の抗日闘争の出発点を提供した。さらに言う、尹奉吉の義挙以後、韓国の独立運動界は活気を取り戻し、臨時政府は中国政府の積極的な支援の下で抗日闘争を展開することができた。そして、中国民衆は日本の侵略に順応せず、反日闘争に進み出るようになり、中国政府もまた日本との抗日闘争を展開せんとする覚悟を持つに至った。

このように尹奉吉の虹口公園義挙は韓国独立運動の歴史のみならず、東アジアの歴史にもきわめて大きな反響を引き起こした。尹奉吉の虹口公園義挙については既存の研究により詳細な部分まで明らかにされてきたが、彼が義挙を起こすに至ったその思想については具体的な研究が進んでいないように思われる。その理由は、もちろん、尹奉吉が 25 年の短い人生のなかで、彼の考えや思想を直接に明らかにした文章が多くないからである。それにもかかわらず、尹奉吉は義挙の前後に自身の見解を詩と若干の文によって書き残しており、義挙以後には日本の官憲から調査を受けた時に、自身の独立運動思想について明確に明らかにしていた。したがって、尹奉吉が虹口公園義挙を起こすまでに、彼が抱いていた考えと独立運動思想について、もう少し綿密に追跡して見る必要がある。

尹奉吉が歴史的な虹口公園義挙を断行するに至った背景には、彼が抱いていた考えや思想があり、ま

た彼自身が独立運動に対する明快な見解も持っていたと言える。ゆえに本稿では、尹奉吉の成長過程から義挙に至るまでの思想的変化と彼の独立運動の路線や戦略について、彼が残した文章と日本の官憲から受けた「訊問調書」を中心に概観しようと思う。しかし、尹奉吉が余りにも若く命を落としたので、彼のまとまった思想や独立運動に対する見解を完璧に再構成するには、多くの推断を加えるしかなかったことあらかじめ明らかにしておく。

## 1. 青少年期：漢学と近代的学問を学ぶ

すべての歴史的人物たちがそうであるが、幼少期には両親と家庭環境に最も大きく影響を受けるわけではない。尹奉吉も幼い頃から両親の影響を最も多く受けたことは間違いない。それゆえ彼の幼い頃について多くのインタビュー調査をし、そのうえ歴史的事実によく接近していると判断できるのは任重彬が書いた伝記『千秋義烈 尹奉吉』である。もちろん、この本には歴史的事実と異なることが断りなく記録されているが、それでも、尹奉吉の幼い頃については、周辺の人物たちの証言を数多く聞き取っているので、信頼できる点があると判断できる。この本によれば、尹奉吉の母親は息子に対する期待がきわめて大きかったという。それゆえに、博識な方とは言えない家長を抱えた母親は、息子だけは満ち足りた教育を受けさせて立派な人にしようと驚くべき執念を見せたという<sup>1)</sup>。母親は尹奉吉の学問に大きな期待をかけて熱心に教育を施した。例えば、昔話を聞かせて訓育し、朝鮮時代の忠臣であった成三問についての話を通して、幼い尹奉吉に道理を覚えさせようとした<sup>2)</sup>。世祖の王位篡奪に最後まで反対し、端宗の復位を試みて死を遂げた成三問という人物は、幼い尹奉吉に深い感化を与えたことは間違いない。

このように、尹奉吉は幼い頃に母から聞いた昔話を通して、正しい人生が何かを無意識に身につけたようである。安重根の母親の趙マリアや金九の母親の郭ナグォン(극원)のように、韓国の偉大な独立活動家の後には立派な母親がいたのである。尹奉吉は幼い頃に母親から多くの影響を受けたからか、母への愛と尊敬心を失わなかった。尹奉吉が中国に亡命すべく故郷を離れた直後の1930年3月20日に平安北道定州のある旅館から送った手紙の冒頭には「子息(を)愛して下さるお母さんへ」〔()内は訳者が補足〕と書き始めているし<sup>3)</sup>、中国に亡命した同年10月18日に青島から送った手紙にも「愛するお母さんに捧ぐ」と書き始めた<sup>4)</sup>。青島から送った手紙で尹奉吉は「お母さんの下書を奉読しましたが、一節ごとに訓戒くださったお言葉から全身に鳥肌が立ち、骨までひりひりし、認められぬこんな奴の目からも時ならぬ雨だれがばたばたと落ち、そして、静かに座って経過を振り返ってみることにします」と書いており、母に対する特別な情を感じ取ることができる。

一人の人間が成長するには幼い頃に家庭で受けた教育も重要だが、それよりも先天的に持って生まれた気質がより重要である。尹奉吉の場合にも、幼い頃の教育よりは持って生まれた性分が並外れていた。なぜならば、彼が虹口公園義挙の2日前である1932年4月27日の夜に金九に渡した「履歴書」に彼の性向の断面がそのまま現れているからだ。その「履歴書」によれば、幼い頃のあだ名が山猫だったと言う<sup>5)</sup>。体つきが小さくとも非常に敏捷で、山猫のように勇敢な性格を備えていたので、このようなあだ名が付けられるようになった。また「履歴書」には、同年輩の者とけんかで負けたことがなく、また接長(집장)〔書堂で先生の補佐をする儒生の長〕に殴られても涙ひとつ流したことがなく、書堂の訓長〔先

生] がふくらはぎを打っても両方の眼を大きく開いてじっと睨んだということからも、幼い頃から肝が据わった太っ腹な子供だったことは間違いない。

ともかく、尹奉吉は幼い頃から他の子供たちとは確かに違う子供であった。彼は7歳の時から伯父が訓長を務める書堂で千字文を習い、11歳になった1918年の春に徳山公立普通学校に入学した。ところで、「履歴書」には徳山公立普通学校に通ったことが抜け落ちている。この「履歴書」は虹口公園義拳の直前に彼が直接作成したものであり、また、金九が早急に履歴を求めたため、普通学校に通ったことをうっかり書き忘れたものなのか、それとも意図的に書かなかったのかは分からない。しかし、筆者の判断によれば、尹奉吉は意図的に記録しなかったものと考えられる。なぜなら、尹奉吉は幼い頃から非常に聡明であったため、自分の履歴事項を記憶できないほど愚かではなかったからである。そして、当時の状況がいくら差し迫っていても、普通学校に通ったことは忘れられることではないだろう。ではなぜ彼は履歴に徳山公立普通学校のことを書かなかったのか。徳山公立普通学校に通ったという事実は、尹奉吉にとって全く重要なことではなかったからである。彼は日本の植民地教育から特に習ったことはないと考えたため、意図的に記載しなかったと見なければならない。

尹奉吉は、徳山公立普通学校に入学した翌年の1919年3月に全国的に三・一独立運動が起きたとき、日本の憲兵と警察が徳山邑内で無慈悲にデモ隊を鎮圧する場面を目撃した。そのしばらく後に、尹奉吉は両親に日本式の教育をする学校には二度と行かないと言って自ら退学した。前述の通り、尹奉吉は他の子供たちとはずいぶん違った子供だった。彼は幼なかったが、植民地教育の不当な処置をそのまま受け入れられる性向を備えていなかった。そのために、幼いにもかかわらず「植民地教育」をこれ以上受けないという決然とした意志を現わしたものと見なければならない。

尹奉吉は植民地教育を受けるのを止める決断を下した。日本式の教育が書堂より劣っていると考えようになったのである。徳山公立普通学校を辞めた後、故郷である柿梁里の松林の裏にある崔秉大の私塾(글방)に通った。その後、尹奉吉は近隣の書堂に通って漢学を修学し、14歳だった1921年からは、隣村のトゥンジミ(둔지미)に梅谷・成周録が開いた烏峙書塾という書堂に入門した。尹奉吉は幼い時から青少年期の17才頃まで書堂で漢学を学び、その後は彼自身が書堂を開いて子どもたちを教えた。換言すれば、彼には幼い頃から書堂で習った儒教的思想が深く染みついていたのだと言える。17才まで尹奉吉が受けた教育は儒教から生まれたものであったと言っても過言ではない。尹奉吉の儒教思想に大きな影響を及ぼしたの成周録だった。成周録の学統と史上については明らかになっていないが、伝記『千秋義烈 尹奉吉』によれば、禮文と経書に明るい伝統的な学者であり、正義感が強い儒生だったとされている<sup>6)</sup>。尹奉吉も成周録も植民地期に大抵の儒学者たちが抱いていた斥邪的性格の儒教思想を備えていたのである。成周録の教えを受けた尹奉吉も自然に儒教的「義」を重んじ正しい道を歩まねばならぬという師匠の教えが深く心に刻まれたものと推測される。周知のように、尹奉吉の雅号は「梅軒」であるが、これは成周録が付けたものである。成周録の号の「梅谷」から「梅」の字を、端宗の復位を試みて死を遂げた成三問の号の「梅竹軒」から「軒」の字を取って雅号を付けたのである。尹奉吉は師匠が付けてくれた雅号を一生の指針として大切にしたが、それほどに師匠の儒教的教えを徹底して守ろうとしたのである。

ところが、尹奉吉は17才の時に成周録から受けてきた儒教經典の勉強にきわめて懐疑的になったよ

うである。そのため彼は烏峙書塾を去ることになった。烏峙書塾を去るまでに彼が修得したのは書堂で習った漢学だけだったが、彼はそれから舎廊房〔サランバン：男主人が来客を接待する居室〕に書堂を準備して、7、8歳の子どもたちを教える訓長の役割を果たした。彼は履歴書に「犬でもなく、糞をする人になった」<sup>7)</sup>と表現してところを見ると、その当時の彼の恥辱感が大変なものであったことがわかる。

だから、尹奉吉は徳山公立普通学校も止めて書堂で儒教教育を受けたけれども、烏峙書塾を去った後には儒教思想が新しい世界を開く指導理念になるとは全く考えていなかったことは明らかである。「履歴書」によれば「16才なっても色々な先生の忠告を顧みず日本語速成読本を買ってきて日本語を自習することにした。1年間「無少間斷」〔少しの絶え間もなく〕「孜孜乞乞」〔熱心に〕学んだために会話はできるようになった」という<sup>8)</sup>。このような記録から推測すると、成周録は尹奉吉に日本語を習うなど言ったが、彼は独学で日本語を完璧に話すことができるまでになったのである。

尹奉吉が日本語を習った理由は近代的な学問を受け入れるためだったことは間違いない。漢学を勉強しながらも、儒教經典と漢学の勉強にきわめて懐疑的だったのである。だから彼は新学問を習いたかったのである。新学問を習うためには植民地教育を施す公的な学校に通わねばならないが、日本式の学校に通うの嫌だった。それゆえ、彼は独学で新学問を学ぶしかなかった。尹奉吉は虹口公園義挙の後に逮捕され、日帝の訊問を受けたとき「17、18歳の頃に新聞や本などを見て朝鮮に日本人が来て朝鮮を統治するのはなぜかという考えも持ち、その後、我が国は我々が治めた方が良いと考えた」と述べた<sup>9)</sup>。17、18才の頃に新聞と本を通して新学問を独学しながら、日帝植民統治の矛盾を自ら体得したのである。

17才まで尹奉吉に最も強く影響を与えたのは儒教思想だったが、前述の通り彼は書堂で儒教經典を勉強していた折々に近代学問についても独学した。彼が主に読んだのは『東亜日報』と『開闢』であり、なかでも『開闢』に掲載された文章は青少年期の人格形成と思想の構築に大きな影響を及ぼしたことは間違いない。なぜなら、当時『開闢』に掲載された文章は、彼がその後に夜学と農村啓蒙運動を始めるのに決定的な影響を及ぼしたからである。当時『開闢』には韓国農村の現実についての文章が載せられ、農村と農民の問題を解決するための啓蒙運動についての文章もたくさん載っていた。これを見た尹奉吉は自分の故郷もほかの地域の韓国農村と同じ問題を抱えており、これを解決するためには農村啓蒙運動をすべきだと考えたのである。彼の「履歴書」によれば、19才の時に疲弊した農村を切り開く目的で、洞里の父老と相談し、金がないため勉強することができない子どもたちを集めて夜学を始めたという<sup>10)</sup>。

尹奉吉は近代的な学問に接してからは徹底した「農村啓蒙運動家」に完全に変貌した。烏峙書塾を去ってから、舎廊房に書堂を開き7、8歳の子どもたちを教えたが、19歳からは文字が分からない子どもや大人たちにハングルと新学問を教える夜学運動を始めた。夜学は甲班と乙班に分けて、甲班は国文を教え、乙班は歴史、算術、科学、そして農作業知識などを教えた。夜学で教える国文は当時普通学校で教える日本語でなくハングルだった。尹奉吉の夜学では絶対に韓国語だけを使って教えたのである<sup>11)</sup>。

また、尹奉吉は夜学で使う教材を自ら作ったのであるが、それが『農民読本』全3巻である。彼の農村啓蒙思想はこの本にそっくりそのまま込められていると言える。『農民読本』は複写本でもともと第3巻までである。これまで『農民読本』第1巻は日帝時代に流失したとされていたが『梅軒尹奉吉全集』の編纂時代に詳しく調べてみると第1巻があることが確認された<sup>12)</sup>。『農民読本』は尹奉吉が農村運動



を展開した当時の自身の考えを整理しているので、彼の思想を最もよく現していると言える。既存の研究によれば、『農民読本』は天道教の農村教育理家であるイ・ソンファンが天道教朝鮮農民社の『朝鮮農民』に掲載した論説と彼が編纂した『農民読本』を参照したとしている<sup>13)</sup>。実際に尹奉吉の『農民読本』ではイ・ソンファンが書いた本や文章を使って書かれている部分が多い。だからといって、尹奉吉が天道教の影響を受けたと見るのは無理がある。当時、全国の農民・農村運動に従事していた青年たちの大部分は、イ・ソンファンに共感していたのが事実である。しかし、尹奉吉が天道教の宗教的教理と天道教教団の立場に同調したのではないと見なければならない。なぜなら、彼が書いた文や、その後の日帝の「訊問調書」などに天道教に関連した内容が全く言及されていないからである。それにもかかわらず、『農民読本』に現れた思想を見ると、天道教で一般的に主張する反封建的思想は尹奉吉に深い影響を及ぼしたと判断される。

尹奉吉は『農民読本』で韓国の農村が真に良い暮らしができる方向性を提示したが、その実践としては「復興院」を建設した。復興院は一種の農民組合と同じ性格を持っていた。農民が主体となって農民を復興させる農民組合だったのである。農民がいつも集まれる集会所が必要だったので、尹奉吉の主導により、1928年2月に徳山郡柿梁里で復興院の建物の棟上げ式を挙行了。復興院を作った後には月進会を組織し、村の青年たちの体力を向上させるために修岩体育会を発足させた。青年たちの体力を鍛錬しようと川辺の広々とした土地に運動場を作った。22歳になった1929年2月には為親契〔老人や親世代の葬礼に備えるための相互扶助組織〕の書記も引き受けた。

## 2. 青年期：農村啓蒙運動に身を捧げる

尹奉吉は夜学を設立し、復興院を建設し、修岩体育会を発足させるなど、農村啓蒙運動に全力を注いだ。そのため、彼の「履歴書」にも「疲弊した農村開拓を目的として洞里の長老と相談し、洞内に三間講堂を建て、お金がなくて勉強ができない子どもたちを集めて夜学に精を出した結果、成績が非常に優秀になった」と書いている<sup>14)</sup>。彼は農村啓蒙運動を通して朝鮮の農村がよりよく暮らせるようになると考えた。しかし、農村の現実はいっそう疲弊して行っていることに深い懷疑を感じるようになった。尹奉吉は20歳を前後する頃から、日本の植民地支配のせいで、これ以上朝鮮の農村の生活水準が良くなれないと悟った。そのような事実、彼が脚本を書いた寸劇によく現れている。1929年2月に復興院の落成式が挙行されたが、そこで復興院の完成を記念して尹奉吉が脚本を書いた「ウサギとキツネ」という題名の寸劇を公演することになった。この演劇はイソップ童話に題材を取って脚色したもので、ウサギとカメがパンを食べようとするや、力の強いキツネが現れ、パンを半分ずつ分けてやると言いながら、全部食べてしまったという話だった。この寸劇はもちろん日本の植民統治を糾弾し、風刺したものだった。力が強く狡猾なキツネは「日本」であり、純真なウサギとカメは植民統治を受ける「韓国人」を象徴している。つまり、この寸劇は日本の植民統治から抜け出すことができない限り朝鮮の農村は疲弊を免れることができないことを表現したものだった。

尹奉吉は「キツネとウサギ」の公演のせいで警察に呼ばれることになった。公演の翌日に徳山駐在所に呼び出された。たかが寸劇を公演しただけでも日帝から調査を受けることになったため、彼には反日

意識が深く植えつけられた。この公演以後、尹奉吉は日帝の監視を受ける「要注意」人物になったのである。その後、1929年4月23日には38人が集まって本格的な農村啓蒙団体として月進会を組織した。月進会の結成にあたっては尹奉吉が自ら趣旨書を作成した。月進会の趣旨書を作成した当時、尹奉吉が日帝の監視を厳しく受けている状況だったので、直接的に植民地支配に対する抵抗や民族独立への意志を表現することはできなかった<sup>15)</sup>。それにもかかわらず、月進会の趣旨書には、当時の尹奉吉の思想の断面が現れている。月進会趣旨書の背後に隠れた深い意味は、ある程度、推察できると思われる。尹奉吉は趣旨書で、帝国主義の不道徳的で反人倫的行為に対して批判しながら、現実世界で「自作自給に力を注ぎ、私の前途を私が履行」するための組織として月進会を結成することにしたと書いた。

月進会趣旨書とともに尹奉吉は「月進会金言」という五つの文字から始まる一種の行動綱領を作った<sup>16)</sup>。「月」では「月の光によって日が落ちた暗闇を再び明るくすることができるだろうから」と、月進会が日本植民支配の暗黒を払いのけて明るい光を照らす先鋒になろうと呼びかけた。そして、尹奉吉が農村啓蒙運動の渦中に作った「柿梁洞歌」は、後日「月進会歌」と呼ばれたが、この歌の歌詞の第3節に「暗黒東天」とあるのは、帝国主義が支配する世の中を意味しており、「啓明星」は帝国主義からの解放を意味している。尹奉吉は帝国主義の反人類的残忍さをぬぐい去って、人類が互いに助け合って生きる「相助相愛」の新世界を建設しようという夢を抱いていた<sup>17)</sup>。

尹奉吉が月進会を組織して農民運動に没頭している頃、1929年11月に光州学生運動が起きた。尹奉吉が光州学生運動によって大きな衝撃を受けたことは間違いない。筆者の判断では、尹奉吉が本格的に独立運動の隊列に参加するべきだと決心した決定的な契機は、光州学生運動より後からであったと思われる。なぜなら、彼が残した『己巳年日記』には1929年12月5日に「光州高普民族衝突」とあり、12月10日には「京城普城高普万歳三唱」と記録した後ろに「一 日本帝国主義打破万歳 二 弱小民族解放万歳 三 奴隸的教育□ [判読不能]」と書きつけているからである<sup>18)</sup>。このように尹奉吉は光州学生運動の直後から独立運動の隊列に参加する決心を固めた。履歴書にも「23歳。歳月が過ぎるほど我々への圧迫と我々の苦痛は増加するばかりだ」、「私はここに一つ覚悟があった」と書いた<sup>19)</sup>。換言すれば、光州学生運動以後に尹奉吉は国内での夜学や月進会を通した農村啓蒙運動に限界を感じて本格的な独立運動に身を投じるべきだと決心した。

虹口公園義挙の後に尹奉吉が逮捕され、1932年5月25日に日本の上海派遣軍軍事法廷で死刑の宣告を受けた時、判決文にも「数年前ヨリ朝鮮力歴史風俗等ヲ異ニセル日本ノ統治下ニ在ルヲ不合理トシ朝鮮民族ノ為其ノ独立ヲ回復センコトヲ熱望」していたとあるが、その時期が光州学生運動以後であった<sup>20)</sup>。それで、履歴書にも「率直に言うと、からからに枯れていく三千里の山河を眺めているだけではいられなかった。水や火に落ちた人を見てそのまま泰然と座っていることはできなかった」と国外亡命を決心したとある<sup>21)</sup>。

尹奉吉は1930年3月に日帝をこの土地から追い出すまでは決して帰ってこないという意味で「丈夫出家生不還」という出師表[出陣の際に決意を記す上奏文]を書いた。23歳で中国亡命を決意したときのものである。また、尹奉吉が1930年10月18日付で母に送った手紙が残されている<sup>22)</sup>。その手紙によれば、尹奉吉は、国内での農村啓蒙運動を繰り広げたが生活がより良くならない理由は日本の植民地支配のせいであり、日本の植民支配を終わらせない限り、韓国民族の経済的苦痛は終わらないから、

これを終わらせるために国外に亡命して本格的な独立運動を繰り広げなければならないと考えていたのである。尹奉吉が国外に亡命する時の思想は、亡命する前に作った「離郷詩」にもそのまま含まれている<sup>23)</sup>。

### 3. 独立運動に参加するため中国に渡る

尹奉吉は1930年3月に23歳で独立運動の隊列に参加するため故郷を離れて国外に亡命することを決めた。彼が中国に亡命した理由について、義拳の直前に金九に渡した履歴書によれば「この覚悟はたいしたものではない。私の鉄拳で敵を即刻つぶそうとするのだ」と書かれている<sup>24)</sup>。尹奉吉の亡命の覚悟は「鉄拳」で敵をつぶすことだった。「鉄拳」、すなわち「武装闘争」によって日帝を打倒しようとした。ところで尹奉吉は「この鉄拳は棺の中に入れば無用である。年をとれば無用である」とも言っている。武装闘争をしなければ役に立たないから年をとる前に武装闘争の隊列に参加しなければと考えた。武装闘争をするためには中国に行かねばならず、そこで独立軍に入ろうとしたのである。そのため、尹奉吉は1930年3月末に鴨緑江を渡って丹東に行き、3月31日に日本汽船の廣利丸に乗って、まず青島に向かった。

前述の通り、尹奉吉が中国に亡命した理由は武装闘争をする独立運動団体に入ることだったと言える。尹奉吉は初めから満州地域の独立軍部隊に参加しようとしたのではないと見なければならない。なぜなら、独立軍部隊に入ろうとするなら中国の丹東から真っ直ぐ満州に行かなければならないのに、船に乗って青島に来ているからである。だから、尹奉吉の中国亡命の目的地は初めから上海臨時政府だったと思われる。そのことは履歴書に「私の耳に暗暗錚錚としたのは上海仮政府だった」と明確に書いていることから確認できる<sup>25)</sup>。尹奉吉は青島でしばらく流浪生活をした後、日本人が経営する洗濯屋で働いた。

尹奉吉は青島の洗濯屋で1年ほど働いたので上海に行く資金を準備することができた。彼は「鉄拳」で日帝を追い払うために上海の臨時政府を訪れたのである。尹奉吉の訊問調書によれば、彼は国内で新聞を見て中国上海に独立運動の中心機関である臨時政府があることを知ったという。もちろん、国内にいる時、『東亜日報』などの新聞を見て知ったのだろう。ところで、尹奉吉は中国上海に臨時政府のような韓国独立運動の機関があることは知っていたが、具体的な組織や活動状況については全く知らなかったようである。訊問調書によると、上海に行って「軍隊組織があれば軍隊に入ろうという考えで来たのだ」という<sup>26)</sup>。尹奉吉が上海に来たのは臨時政府に入って武装闘争をしようとしたからであり、彼の推測では臨時政府内に軍人を養成する教育機関があると思っていたのである。そして、尹奉吉は上海にある軍人養成機関に入って軍事訓練を受け、直接的な独立戦争に加担しようとしたのだ。しかし、上海に来てみると軍隊を養成する制度や施設が全くないことを知った。そのため、個人的にできる独立運動の方案を模索するために、上海にいる独立運動の指導者たちを探し回っていたものと推測される。

尹奉吉が1931年5月8日に上海に到着してからの彼の足取りについては、義拳以後に日帝による調査を受けた訊問調書で確認するしかない。尹奉吉は1932年4月29日の義拳の直後に上海の憲兵隊で2回の訊問を受けた後、5月19日に予審が終結するまでに7回に亘り訊問を受けた。7回の訊問調書のすべては残っていないが、その要旨は残っているので、それを通じて尹奉吉が上海に来てからの行動と

独立運動についての考えをそれなりに推察することができる。もちろん、尹奉吉の訊問調書には、日帝の捜査を混乱させるために事実を正確に明らかにしていないことも多い。そうではあるが、尹奉吉が上海に来てからの行動については、相当に事実に近いものと考えられる。なぜなら、あえて彼の行動について偽りを言う必要がなかったからである。尹奉吉の訊問調書によれば、彼は1931年5月8日に汽船で青島から上海に「上陸シテ直チ二人力車夫二韓国僑民団へ行ツテ呉レト頼ミ人力車二乗ツテ僑民団事務所へ参リマシタ」という。そして、僑民団事務所で団長の金九と幹事の金東宇に会い、彼が上海に来た理由を話した<sup>27)</sup>。

尹奉吉は上海に来るや直ちに臨時政府を訪ねて金九に会っているのである。そして、訊問調書によれば、彼が「霞飛路一〇一四弄内二十七号二住ンテ居タ頃、同弄内三十号二興士団ト云フ朝鮮人ノ修養団事務所カ有リ、其ノ団長ノ安昌浩ト云フ人ニハ、一、二度会フタ事カアリマス」と答えている<sup>28)</sup>。尹奉吉は興士団事務所を訪ねて安昌浩にも会っているのである。ところで、尹奉吉が上海に来た目的は武装闘争をするためだった。彼は興士団事務所に訪ねて行ったが、安昌浩は直接的な武装闘争をする独立運動路線をとっていなかったため興士団には加入をしなかったと推測される。だから訊問調書でも尹奉吉は興士団のことを「修養団」と表現している。

尹奉吉の履歴書が書かれたノートには安昌浩のほか、崔東昨、金毅漢、金料奉、李裕弼、朴昌世らの臨時政府要員名簿が記されている<sup>29)</sup>。また、訊問調書によれば、尹奉吉はこれまで会った独立活動家の中で「偉イト思フ人ハ誰レカ」という質問に対して「安昌浩、金東宇、金九、李裕弼、李東寧、趙素昂、李春山等デアリマス」と答えている<sup>30)</sup>。これによれば、尹奉吉は上海に来てから臨時政府の要人たちを訪ねて回ったことは事実である。また、履歴書が書かれたノートに尹奉吉が自ら描いた李東寧の肖像画『全集』2, p.779]があることから、李東寧に何回も会ったことは間違いない。

だが、尹奉吉が上海に来てから最も多く会った人は白凡金九だった。実際に、尹奉吉が虹口義挙を起こせるように段取りをし、直接的な思想を植え付けた人物が白凡だった。尹奉吉は義挙後に直ちに逮捕され、上海第一憲兵分隊で最初の訊問を受けた。第一憲兵分隊で陸軍憲兵大尉の大石正幸に訊問を受ける時、尹奉吉は背後に金九がいることを隠すために、意図的に仮想の人物である「李春山」の名を挙げた<sup>31)</sup>。伊藤博文を射殺した安重根も訊問調書で上官として「金斗星」という名を挙げたし、李奉昌も訊問調書「白貞善」という仮想の名前を話したように、尹奉吉も「李春山」を名指した。

訊問調書で尹奉吉は青島から上海に来た後の1930年7月に「李春山ト四海路ト馬浪路ノ交差点ノ茶館ニテ初メテ会ヒ知合トナリマシタ」と答えている<sup>32)</sup>。もちろん、李春山は金九のことである。そして「其ノ後ハ前記茶館ニ於テ毎月二回乃至三回李ト朝鮮独立運動ニ就キ語り合ツテ居リマシタ」とした。しかし、先の訊問調書で確認したとおり、尹奉吉は上海に来てすぐ最初に会った人が金九であり、上海に来てから1ヶ月に少なくとも2～3回定期的に会ったと言っている。金九の自叙伝『白凡逸志』によれば、金九は初めて会った時から尹奉吉が上海に独立運動をする目的で来たとなっていた<sup>33)</sup>。

尹奉吉は上海に到着した直後に金九に会い、1931年6月に朴震が経営する髪品会社に就職した後、9月頃まで金九は「毎週一回位ヤツテ来テ従業員ト種々時事問題等ヲ話シタコトカアリマス」とのことである<sup>34)</sup>。この頃に尹奉吉は金九が抱いている独立運動に関する見解を十分に聞くことができた。おそらく尹奉吉は金九が話す独立運動路線と方略に深く共感するようになったと推測できる。そして尹奉吉は



金九に自分が上海に来た目的は武装闘争を展開するためだという話をしたかもしれない。

それはともかく、上海に来た尹奉吉はそこにある軍隊養成機関に入ろうとしたが、そのような組織がないことを知り、ひどく失望した。そして、上海で活動していた様々な独立活動家たちに会うようになったが、彼が望むような武装闘争とは相当な距離があった。そのため彼はどの独立運動団体にも加わらなかった。髹品公司で働いた尹奉吉はそこでもめ事があったために辞めて、日本人たちが暮らす虹口地域に行き、野菜と小麦粉を売る商売をした。その間、1932年1月8日に李奉昌が東京で天皇を処断しようとして義挙を起こした。李奉昌義挙の直後に日帝が上海を侵略した上海事変が起こった。しかし、中国政府はイギリスの調整の下に日本と停戦会談をして、中国十九路軍を上海から撤退させることに同意した。日本の上海侵攻により軍人死傷者1万3千人余り、民間人死傷者2万人余りを出しても、中国は日本に対して屈辱的な姿勢を取っていた。

#### 4. 義烈闘争のために韓人愛国団に加わる

上海に渡った尹奉吉は金九の独立運動路線に対して相当な信頼を寄せていた。髹品公司を出て野菜を売って虹口方面を歩き回ったのも、何らかの機会を待っていたのである<sup>35)</sup>。前述の通り、上海に来てから尹奉吉は、毎月2、3回、白凡・金九と会っており、彼の独立運動思想に強く共感をするようになった。金九は、いま我が民族が日帝に向かって戦っても勝てないが、世界戦争が起きたなら、そのときこそは独立戦争を起こさねばならないと尹奉吉を説き伏せた。武装闘争をするために上海に来た尹奉吉は、軍隊組織に入ることができなかったが、彼が願った直接的な「武装闘争」の一環である「義烈闘争」路線に積極的に賛同するようになったのである。金九は李奉昌の東京義挙に続いて虹口公園義挙を決行した理由を「人道ト正義ノ名ニ於テ且ツハ我カ友ヲ日本ノ侵略政策粉碎ノ任務ニ招致セシムトスル希望ノ下ニ」とした<sup>36)</sup>。言い換えれば、白凡は虹口公園義挙を通じて「我カ友」すなわち「中国」を日帝に立ち向かって戦うようにしようとしたのである。

尹奉吉は上海に来てから金九の影響を最も強く受けた。訊問調書によれば、尹奉吉は「然ラハ被告人個人トシテハ如何ニスレハ朝鮮ノ独立カ出来ルト思フカ」という質問に対して「現在テハ朝鮮ハ実力カ無イカラ積極的ニ日本ニ反抗シテ独立スルコトハ不可能ト思イマス」と答え、続けて「世界ニ大キナ戦争テモ起リ強国力疲弊スレハ其ノ時ニ…例ヘハ欧州大戦後セルビヤ、ポーランドノ各国カ大国カラ解放サレタ様ニキツト朝鮮モ独立カ出来ルタロウト考ヘテ居リマシタ」と答えた<sup>37)</sup>。このような尹奉吉の返答は当時金九が抱いていた独立運動方略と完全に一致する見解だった。

訊問では続いて「大戦争ヲ誘発スル運動ヲナスコトカ出来ナケレハ独立運動家トシテ役ニ立タヌデハナイカ」との質問を受けたが、これに対して尹奉吉は「吾々独立運動者ハ木ニ肥料ヲ与ヘタリ水ヲ注イタリシテ自然ノ發育ニ助力スルト同シク国家盛衰ノ循環ヲ早メルノカ役目テス」と答えた<sup>38)</sup>。すなわち、独立活動家はたとえ直ちに日帝に立ち向かって独立戦争を展開することができなくても、日帝の廃亡を早めるために闘争をしなければならないとした。それゆえ、虹口公園義挙のような挙事を引き起こし、日帝に打撃を加えて、日帝の廃亡へと一步近付くようにしようとした。

それでは、尹奉吉が金九の韓人愛国団と関係を結ぶようになったのはいつからだったかについて見て

おく必要がある。尹奉吉は1931年5月に上海に来てから金九にしばしば会ったが実質的な独立運動には加担しないでした。すると、1932年1月8日に李奉昌が東京義挙を執行し、天皇の処断には失敗したが、これによって上海事変が勃発し、金九が望む日中間の戦争が起きたのである。そして、尹奉吉が金九の韓人愛国団と関係を結んだのは、彼の友達である兪鎮植を通してであったと推測される。訊問調書によれば、尹奉吉が兪鎮植に初めて会ったのは、1931年12月頃、すなわち尹奉吉が「霞飛路ノ一〇一四弄内二七号ニ」住んでいる時であり、「興士団へ兪鎮植カ来テ、其ノ時私ノ部屋ヲ訪レ私ノ部屋ニ同居ヲ求メマシタ」と答えている<sup>39)</sup>。しかし当時彼は高栄善と一緒に居たので同居できないと断った<sup>40)</sup>。訊問調書によれば尹奉吉は兪鎮植に10回会った答えているが、それ以上である可能性もある。いずれにしても、兪鎮植が金九の特務組織である韓人愛国団に加担していた時期であった。また、訊問調書によれば、1932年2月下旬に尹奉吉が兪鎮植の家に行った時に彼の家で「李奉昌カ爆弾ト拳銃ヲ手ニ持チ宣言書ヲ胸ニ掲ケ韓国旗ヲ背景ニシテ写ツテ居ル写真ヲ見セテ貰」ったと答えている<sup>41)</sup>。

そして、尹奉吉が3月中旬に再び兪鎮植の家に行った時、兪鎮植は「自分ハ此度暗殺スル為ニ朝鮮ニ戻ル様ニナツタ」と明確に話した<sup>42)</sup>。こうして見てくると、兪鎮植は尹奉吉と初めて会った時から独立運動について意気投合したから一緒に暮らそうと言ったし、しばしば会ってよりいっそう独立運動についての見解をともにすることができた。だから兪鎮植は尹奉吉に韓人愛国団に加入して国内に入って朝鮮総督を処断せよとの金九の秘密指令まで教えたのである。

兪鎮植と親しくなった尹奉吉は、兪鎮植の紹介で金九が推進した特務工作に参加することになったと判断できる。李奉昌義挙によって勃発した上海事変の推移を展望していた金九はさらに日帝に打撃を与える特務工作を推進しようとした。李奉昌の東京義挙以後、金九は上海兵工廠に勤める金弘壹（中国名：王雄）と特務工作について話することになり、二人の間で様々な計画を推進しようとした。金弘壹は上海事変当時上海兵工廠の兵器主任でありながら、第一九路軍の情報局長を兼職していた。そのため、彼は日本軍についての情報を正確に把握していたのである。金九が当時推進していた特務計画については他に資料がないため正確に確認する方法はないが、金弘壹が残した「30年の独立闘争記」によれば、さらに他の計画も推進されていたことがわかる<sup>43)</sup>。その中の一つが日本海軍巡洋艦「出雲」爆破計画だった。

金弘壹は上海を侵略した日本軍司令部が黄浦江の虹口埠頭に停泊中の日本海軍巡洋艦「出雲」に設置されているという情報を入手した。その情報を伝え聞いた金九は虹口埠頭に停泊中の「出雲」を爆破することに決定したが、実行する適任者を探すことができなかった。これについて金九は金弘壹と相談し、中国人の水鬼を1000ウォンで雇用することにした。金九は中国人の水鬼二人を雇って上海兵工廠で製作した特殊爆弾を「出雲」の下にぶら下げてから爆破させる計画だったが、「出雲」を爆破できず、中国人水鬼二人だけが犠牲になってしまったという。

また、金弘壹の回顧にも「出雲」特務活動が挫折した後、金九は上海の虹口地域にある日本軍江湾飛行場と埠頭の武器倉庫爆破計画が記録されている。その時に尹奉吉が直接的に金九の韓人愛国団と関係を結ぶことになったようである。しかし、具体的なことは分らない。ただし、尹奉吉は兪鎮植の紹介で韓人愛国団に加担した可能性が高いと推測される。江湾飛行場武器庫爆破計画は、尹奉吉ら何人を選抜して埠頭労働者に浸透させて爆破しようと計画された。この計画に参加した当時、尹奉吉が韓人愛国

団の正式団員になったわけではないが、上海にいた愛国青年たちと一緒に志願して特務活動に参加することになったのである。しかし、この計画は特殊爆弾を製作して性能を試験するために期日が遅れてしまって労働者が武器庫に接近できる機会が霧散してしまった。以上の二つの計画は失敗したが、金九は尹奉吉の虹口公園義挙に先立って、二人の韓人愛国団員を国内に派遣した。『白凡逸志』によれば金九は「李徳柱、兪鎮植には倭の総督の暗殺を命じて本国に先発させ」と言う。二人の韓人愛国団員に宇垣一成朝鮮総督を処断せよと命じて国内に派遣したのである<sup>44)</sup>。

尹奉吉は虹口公園義挙より前から金九の特務活動に参加していたと見なければならない。そして金九と尹奉吉をつないだのは、前述の通り兪鎮植だったと推測される。李奉昌の東京義挙以後に上海事変が勃発しており、独立戦争の機会を模索していた尹奉吉は李奉昌と同じように義挙を起こして中日戦争へと拡大させようとの考えを抱いていた。だから、尹奉吉は江湾飛行場武器庫爆破計画にも参加することになったのである。当時、尹奉吉は李奉昌に東京義挙を起こさせた背後には金九がいたことをよく分かっていて、それゆえ、尹奉吉は金九を訪ねたのであり、野菜をかついで毎日虹口方面に通うのは、大仕事をする機会を模索していたのだと告白した。金九は尹奉吉に、次に良い計画があれば必ず機会を与えるとの約束をした。

尹奉吉の虹口公園義挙は、尹奉吉一人が起こしたものではなく、彼の背後には大韓民国臨時政府があり、臨時政府閣僚会議で議決された特務組織である韓人愛国団という組織があったのである。韓人愛国団は臨時政府の直属機関として団長である白凡金九の専断の下に義烈闘争を遂行した組織である。尹奉吉と金九の関係については、虹口公園義挙の直後に韓人愛国団の名義で「虹口公園爆弾案の真状」という文書が発表されている<sup>45)</sup>。金九は自身の立場を対外的に広く知らせるために、韓国語と中国語で書かれた3枚の印刷物を作成して広く配布した。その内容を見てみると「私たちが敬慕と潔愛する金九先生」とか「私たちがよく知る彼は今年で57才になった一人の老人」という表現から、金九の最側近であった嚴恒燮が書いたと思われる。この文書は「虹口公園の件」の真相について詳しく説明し、偉業を起こした団体が「韓人愛国団」であるとをはっきり明らかにしている。例えば、「愛国団の一員」「愛国団とはどのようなものか」「愛国団の首領は誰か」などの目次を付けて、「東京義挙」と「上海義挙」の主体はすべて韓人愛国団だと明らかにした。

## 5. 虹口公園義挙を執行する

尹奉吉が虹口公園義挙を挙行した根本的理由は、中国と日本が戦争を起こすようになる条件を作ったと言えらる。金九は李奉昌と尹奉吉の義挙を準備する過程で、これらすべての事項を臨時政府国務会議に事前報告した。李奉昌義挙を準備する間、金九は1931年12月6日の夜に臨時政府庁舎で開かれた国務会議で、李奉昌が天皇を爆殺する計画を報告したのである<sup>46)</sup>。次に尹奉吉の虹口公園義挙の直前に金九は臨時政府財務・軍務担当国務委員として4月26日に国務会議を緊急に招集した。この国務会議で金九は「来る4月29日に虹口公園で日本陸軍の閲兵式が挙行されるので、尹奉吉義士を利用して爆弾を投擲させ、再び日支戦争を勃発させる計画を進めた」と報告した<sup>47)</sup>。

このような金九の独立運動戦略に、尹奉吉も積極的に賛同したがゆえに虹口公園で日帝侵略の元凶に

対する投弾義挙を起こした。尹奉吉に対する訊問調書によると、予審官の陸軍法務官・原憲治は虹口公園義挙が「独立運動ト云フ意味カラ云ヘハ甚タ効果ノ少イモノノ様ニ思フカ如何ニ考ヘルカ」という質問をしたのに対して、尹奉吉は「勿論一人ヤ二人ノ上級ノ軍人ヲ殺シテ独立ガ容易ニ行ハレルトハ思ヒマセヌカ、只、朝鮮ノ覚醒ヲ促シ更ニ世界ノ人々ニ朝鮮ノ存在ヲ明瞭ニ知ラセル為テアリマス」と明確に答えた。また、尹奉吉はこのような独立運動に対する考えは「李春山カ其様ナコトヲ云ツタノテアリマス」と、自分の考えでもあるが金九の考えでもあると答えた〔前述の通り、ここで尹奉吉が「李春山」と名指しているのは金九のことと推定される〕<sup>48)</sup>。尹奉吉の判決文でも「茲ニ今ニ將軍〔白川義則と植田謙吉〕ヲ殺害シタリトテ朝鮮独立ノ為ニハ直接効果ナカランモ以テ朝鮮人ノ覚醒ヲ促シ他面世界ノ人々ニ朝鮮ノ存在ヲ識ラシムルヲ得ベシト思惟シ愈右ニ將軍ヲ殺害セシコトヲ決意シ」とされている<sup>49)</sup>。

『白凡逸志』によれば、尹奉吉は李奉昌義挙の後、引き続き直接的な武装闘争を展開する機会を窺っていた。その頃に金九に会った尹奉吉は「もはや中日間の戦争も終わってしまい、どこを見回してもなかなか死に場所が見つかりません」と嘆いてから、「東京事件のような計画があったら、自分を使ってください」と言った<sup>50)</sup>。金九は「わたしは、ちょうど君のような人物を探していたところだから、安心なさい」<sup>51)</sup>と言い、尹奉吉に次に良い計画があれば必ず機会を与えると約束をした。事実、金九は「東京の件」以後、日帝の検挙を避けながらも天皇の誕生日である天長節記念式が挙行されるという消息を聞いた。祖国のためにいつでも犠牲になる心の準備ができているという尹奉吉の決心を確認した金九自身も、長らく第二の李奉昌のような人物が出現するのを待っていたのである。しばらくして金九は日本語新聞の『上海日日新聞』に「『天長節』祝賀式に参加する者は弁当と水筒と日章旗を一つ携帯して来るように」という記事を見た<sup>52)</sup>。これを見た金九は王雄（金弘壹）に水筒爆弾と弁当爆弾の準備を依頼し、上海兵工廠で作ってもらうことになった<sup>53)</sup>。

尹奉吉は、4月29日の朝6時に宿舍を出て金九と朝食を終え、金九が渡した二個の爆弾のうち弁当爆弾は風呂敷に包み、水筒爆弾は肩に結んだ。そして「自動車代を払っても五、六円は残りますよ」と言って、持っているお金を金九に渡した<sup>54)</sup>。尹奉吉は午前7時45分頃に虹口公園に到着し、7時50分頃に公園の正門から入場して、一般観覧客らと一緒に行事を見守りながら爆弾を投げる機会を待っていた。

この日の行事には上海に居住する日本人1万人余りが動員されており、日本の軍人らと各国の外交官や武官らが招待されて、2万人余りが参観していた。行事は一部と二部に分かれており、第一部は上海事変を挑発した日本軍の観兵式が、第二部は官民合同の祝賀式が挙行された。第二部の開会辞と祝辞が終わった頃に雨がひどく降り始めた。11時40分頃に雨が降るなか日本の国家が斉唱され、式壇には左側から村井倉松上海日本総領事、植田謙吉陸軍第九師団長、白川義則上海派遣陸軍大将、野村吉三郎海軍第三艦隊司令官、重光葵駐中日本行使、河端貞次上海日本居留民団長、友野盛上海日本居留民団書記長ら7人が並んで立っていた。

尹奉吉は国家斉唱が終わる11時50分頃に弁当爆弾を足下に下ろし、肩に結んだ水筒爆弾を右手に握り、左手で発火紐を引き抜いた。そして、2、3人を肩で押しながら、約4m前に進んで19mの距離から爆弾を壇上に向かって投げた。爆弾は壇上の中間に落ちて、轟音をとどろかせながら爆発し、白川陸軍大将ら日本の要人7人はその場に全員倒れた。



## おわりに

尹奉吉は幼いころから先生や近隣の大人たちから「才童」<sup>55)</sup>あるいは「神童」<sup>56)</sup>と褒め称えられるほど才能に溢れていた。尹奉吉は公式の学校教育を受けなかったにもかかわらず、持って生まれた才能と絶え間ない努力で相当に高い水準の知識を習得した。そして、幼い時から習った漢学は四書五経をすべて修得し、彼が作った多くの漢詩はすべて秀作だと評価されている。このように尹奉吉は、虹口公園義挙の当時まだ24歳の若さにもかかわらず知的水準が相当高かったため、独立運動に対する見解もきわめて明快な青年だった。

尹奉吉は1932年4月29日に上海で虹口公園義挙を起こしたことで、韓国独立運動の水の流れを変えた。彼が義挙を決行するに至ったのは、日本に対抗する堅固な反帝国主義的思想があったからである。尹奉吉は大胆剛毅な性格を生まれ持っていたし、幼い頃から家庭できわめて独立的な教育を受けた。7才の時から書堂で千字文を学び、烏峙書塾で成周録から儒教思想を伝授された。一方で、新学問を学ぶために日本語を独学し、当時の新聞と雑誌を通して相当な水準の近代的学問を習得した。

そして尹奉吉は夜学を設立して、復興院を建設し、修岩体育会を発足させ、月進会を組織して農村啓蒙運動に全力を注いだ。月進会を拠点として農民運動に没頭している頃に光州学生運動が起き、農村啓蒙運動だけでは根本的に朝鮮農村の生活改善ができないと限界を感じるようになった。その後、日帝植民支配を抜け出すためには直接的な武装闘争を展開するべきだと認識するようになった。そして本格的に武装闘争によって独立運動に参加するために1930年に中国に亡命した。その後、1931年5月に尹奉吉は上海で毎月2、3回、白凡金九に会って、彼の独立運動思想に共鳴するようになった。金九は当時の我が民族は日帝に立ち向かって勝つことができないが、世界戦争が起きたなら独立戦争を起こすべきだと尹奉吉に説明した。金九の独立運動戦略に積極的に賛同した尹奉吉は、世界戦争が勃発すれば我々の独立を早められるとの希望の下に虹口公園義挙を起こすことになった。

尹奉吉が1932年4月29日に虹口公園で举行した義挙は、形態上は日帝侵略者たちを懲らしめた投弾義挙に見えるかも知れないが、実際に尹奉吉義挙は日本の帝国主義侵略による植民地支配の矛盾を国際的に知らせ、全人類が自由と平等を享受することができる正義の世界の実現をより早めるために実行した挙事だったのである。

1930年代の初期に金九が韓人愛国団を通して展開した独立運動戦略はきわめて成功的だったと言える。韓国独立運動界の始終一貫した念願は日帝と独立戦争を起こすことだった。その戦略とは、大規模に世界大戦が起きれば必然的に日本が世界列強と戦争をすることになるとの展望であった。世界戦争、米国と日本、あるいは中国と日本が正面から戦うことになる時、韓国民たちは日本と正面对立した国家とともに独立戦争を展開し、勝利をおさめて独立を勝ち取るという戦略である。

それゆえに、積極的に世界戦争を起こす機会を作ろうとし、日帝が1931年9月18日に満州侵略を断行したのを契機に本格的に日中戦争が起きることを期待したが、中国の民衆と中国政府は日帝の侵略を容認してしまった。そんな折りに、1932年1月8日、金九は李奉昌を東京に派遣して義挙を起こせしめ、これによって日帝は中国を侵略する上海事変を起こすことになった。しかしながら、上海事変はそれ以上日中間の戦争が拡大することなく、中国の一方的な敗北で片が付いていた。すると、金九は

これに対して、日本と中国の間の戦争を拡大させるために尹奉吉に虹口公園義挙を起こさせたのである。尹奉吉の虹口公園義挙によって、中国政府は本格的に対日抗争に参加することになった。

このように、尹奉吉の虹口公園義挙は日中間の本格的な戦争を誘発させ、韓国独立運動の機会をとらえようとする独立運動戦略の下で果たされた偉業であった。そのような計画の中でも、最も重要な役割は、上海虹口公園で投弾義挙を成功裏に成しとげて、中国と日本が本格的な戦争に突入するようにさせることだった。尹奉吉の義挙は、歴史的に見れば日中間の直接的な戦争を誘発させることはなかったが、その間消極的だった中国の民衆と中国政府に、韓国独立活動家こそが最も信用できる抗日の同志であることを刻印させ、抗日闘争に積極的に取り組むようになる起爆剤になったと評価することができる。

[日本語訳 勝村誠]

## 注

- 1) 任重彬『千秋義烈 尹奉吉』人物研究所, 1975, p.62.
- 2) 同上, p.88.
- 3) 「子息 愛してくださるお母さんへ」梅軒尹奉吉義士記念事業会『梅軒尹奉吉全集』（以下、『全集』とする）1, 2012, pp.841-844.
- 4) 「愛するお母さんに捧ぐ」『全集』1, pp.845-847.
- 5) 「履歴書」『全集』2, p.30.
- 6) 前掲, 任重彬, p.87.
- 7) 前掲「履歴書」『全集』2, p.31.
- 8) 同上.
- 9) 「上海爆弾犯人尹奉吉公訴提起に関する件通牒(添付尹奉吉訊問調書)」(以下、「訊問調書」とする)『全集』2, p.119.
- 10) 前掲「履歴書」, p.31.
- 11) 前掲, 任重彬, pp.118-119.
- 12) 이현주「第1巻 詩文と農民運動 解題」『全集』1, pp.17-18.
- 13) 同上, pp.20-21.
- 14) 前掲「履歴書」p.31.
- 15) 「月進会趣意書」『全集』1, pp.913-916.
- 16) 「月進会金言」『全集』1, p.936.
- 17) 前掲「履歴書」p.31.
- 18) 「己巳年日記」全集 1, p.798.
- 19) 前掲「履歴書」p.32.
- 20) 「爆弾事件犯人尹奉吉ニ対スル判決」『全集』2, p.650.
- 21) 前掲「履歴書」p.32.
- 22) 前掲「愛するお母さんに捧ぐ」『全集』1, pp.845-847.
- 23) 「離郷詩」『全集』1, p.54.
- 24) 前掲「履歴書」p.32.
- 25) 同上.
- 26) 前掲「訊問調書」p.120.
- 27) 前掲「訊問調書」『全集』2, p.594.
- 28) 同上, p.595.
- 29) 『全集』2, p.780.
- 30) 前掲「訊問調書」p.602.
- 31) 「上海虹口公園ニ於ケル爆弾投擲事件」『全集』2, p.685.
- 32) 同上, p.684.
- 33) 金九(著)・梶村秀樹(訳注)『百凡逸志一金九自叙伝』平凡社, 1973, pp.263-264.
- 34) 前掲「尋問調書」p.591.

- 35) 前掲『百凡逸志』 pp.263-264.
- 36) 「虹口公園爆弾事件の真相」『全集』 2, p.667.
- 37) 前掲「尋問調書」 pp.599-600.
- 38) 同上, p.598.
- 39) 同上, p.582.
- 40) 高栄善は韓国光復軍総司令部の政訓處で活動した人物であると推定される。金光（김광）『我が友 尹奉吉』（나의 친구 윤봉길）図書出版先人（선인）, 2017 年 .
- 41) 同上, p.585.
- 42) 同上, p.581.
- 43) 金弘壹「30 年の独立闘争記 完：中日戦争と臨政」『思想界』 1965 年 9 月号, pp.241-242.
- 44) 前掲『百凡逸志』 p.263.
- 45) 前掲「虹口公園爆弾事件の真相」『全集』 2, p.62-68.
- 46) 国史編纂委員会『韓国独立運動史資料 2』（臨政編Ⅱ）, 1971, p.257.
- 47) 同上, p.258.
- 48) 前掲「尋問調書」 pp.596-598.
- 49) 「爆弾事件犯人尹奉吉ニ対スル判決」『全集』 2, p.649.
- 50) 前掲『百凡逸志』 p.264.
- 51) 同上, p.264.
- 52) 同上, p.264.
- 53) 同上, pp.264-265.
- 54) 同上, p.268.
- 55) 前掲「履歷書」 p.30.
- 56) 前掲「虹口公園爆弾事件の真相」 p.64.

